『暗夜行路』の〈京都〉像

――近代都市・京都をめぐって――

青木京子

一、はじめに

〈京都〉といえば伝統的な古い町並みや古い寺といった〈古都〉のイメージが強い。『暗夜行路』もそのような観点で論じられることが多かった。

例えば紅野敏郎氏は、「直子との恋愛過程」〔「シンポジウム『暗夜行路』をめぐって」「国文学」一九七六・三〕の中で、「落柿舎のところから二尊院を通ってゆくようなところ」は「京都というものを自分の手で掴んでいったプロセス」があり、それは「古い東洋的な芸術的な接近」で、「同時にそれは京都歳時記物語」であるとし、清水康次氏も「『暗夜行路』『第三』を読むあやうさを潜めた好転」（「光華女子大研究紀要」平13・12）で、「日本や中国の古典美術と京都の風景が謙作の心をいやし、落ち着かせ、満たしていく」としている。宮越勉氏も「時任謙作の人間像をめぐる考察――『暗夜行路』の展開に即して――」（「文芸研究」12・3）の中で、「謙作は京都で古寺、古美術に慰藉」されるとし、〈京都〉は謙作の心を癒す安息の場として捉えられてきた。

しかし、〈京都〉に対応する後篇「第三」「第四」には、市電、カフェー、百貨店など、いかにも新しい時代を思わせる表現が頻出し、近代都市・京都像が顕著である。

本稿では、克明にしたためられた「志賀直哉日記」を手がかりとし、後篇「第三」「第四」に記載された都市交通、近代建築、娯楽などの近代的な表現に着目することにより、『暗夜行路』の近代都市としての〈京都〉像について考察したい。さらに、それらは、「志賀直哉日記」の記述を踏まえて描かれてい

ることを指摘したい。

また、阿川弘之氏は、後篇「第四の十一」の「京都発午後三時三十六分の鳥取行、五時三十二分の城崎行」の記述について、「大正初年を舞台に生活してゐる作中人物が昭和二年の時刻表で旅する矛盾は見落されてしまつた」とし、『暗夜行路』は「大正初年を舞台にしてゐる」との指摘が見られる（『志賀直哉』岩波書店、一九九四・七）。果たして、後篇の舞台は「大正初年」と確定してよいのだろうか。後篇については、「大正初年から昭和初年」にかけての〈京都〉像を表象しているように思われるのである。

そこで、『暗夜行路』における〈京都〉は、どの時代を表象しているのかを明確にしたい。さらに、荻田式飛行機・墜落惨状の展覧時期について、阿川氏の指摘に若干の修正を加えたい。

『暗夜行路』の〈京都〉像をさぐることは、近代都市・京都の変遷を捉えるうえで、重要な手がかりになるのではなかろうか。

二、『暗夜行路』と〈京都〉

一、『暗夜行路』の舞台と「志賀直哉日記」

〈京都〉に関する表現を丁寧にたどり、一覧表を作成すると次のようになる。

【『暗夜行路』の〈京都〉像　太字は近代性を表象したもの】

地名・年代	寺・通り・建物	芸術・娯楽・料理	交通・電燈	その他
前篇 第二の九			京都止りの列車 京都で急行	
第二の十二	祇園の八坂神社の下	場末の寄席（蝮のお政の一代記）		
後篇 第三の一	釈迦堂、二尊院、祇王寺、東三本木の宿、新しく出来た河原の広い道、加茂川、大文字、東山、黒谷、吉田山、比叡の峰、南禅寺、若王子、法然院、荒神橋、荒神橋、丸太町橋、祇園の石段下、四条通り、お旅、新京極、寺町、丸太町	二尊院（「法然上人足びきの像」） ドンキホーテの恋、ドンキホーテの恋、トボソのダルシニア、ドンキホーテの恋	電燈 明るい電燈 東山廻りの電車	
第三の二	大文字、博物館、博物館、博物館、太秦、高台寺、西大谷、鳥邊山、清水の音羽の瀧、高台寺、八坂神社、四條通り、四条の橋、八坂神社、四条通り、四条の橋、東三本木の宿、叡山、荒神橋の袂、東三本木の通り	古い掛け物の絵、如拙の瓢箪鮎魚図、支那人の絵で南画風の松、呂紀の虎、支那人の鷹、金鶏島の大きい雙幅の花鳥図、泉涌寺「律宗三祖像」二尊院の肖像画、広隆寺「弥勒思惟像」四條の橋「西洋料理」シチウ、同人雑誌、洋画家、東三楼、大学や市立へ通はれる病人さん	電車、電車（市電東山線）	華美な装ひをした若い人達

第三の三	五条、荒神橋、一枚橋、新京極、東三本木の宿、大学病院	活動写真（真夏の夜の夢を現代化した独逸物の映画）ポールの選手			
第三の五	東三本木の宿、南禅寺の北の坊、高台寺、麩屋町、北野の方、円山の方	すつぽん屋封切りの忠兵衛	車、車、電車（北野）	冬物の衣装市会議員古本屋	
第三の八	東三本木	東三楼	停車場、停車場		
第三の九	黒谷、真如堂、銀閣寺、法然院、松虫鈴虫の寺、南禅寺北の坊、若王子の裏、法然院の庭、若王子、永観堂、南禅寺、南禅寺の裏山の中腹、疏水の上、インクライン、寺町、嵐山、金閣寺	瓢亭（南禅寺）喜劇の訳本（「かいら騒ぎ」）、活動写真（「真夏の夜の夢」）	急行、車、明るい電燈、電燈、電燈、電車、電報、停車場、三等、汽車賃、汽車、三等客車、六百円の電話		
第三の十	新京極、私立大学の文科、四条高倉の大丸の店（深草練兵場で落ちた飛行機展覧）女竹の植込み		車、車（三等客車）	駿河屋	
第三の十二	南座、八坂神社、知恩院、知恩院、銀閣寺、安楽寺、法然院（阿育王塔）銀閣寺、（向台に銀砂灘、左右の唐紙は大雅堂の筆）南禅寺の裏、疏水、黒谷（人工の流れ）	南座（顔見世、「紙屋治兵衛」の川庄うちの場）	電話		

第三の十三	円山、東三本木、高台寺の方の貸家、五条坂（陶工の家、六兵衛、清風、宗六、木仙、赤絵の振出し）、五条の橋（仮橋）、東三楼、四條、菊水橋（蠣船）、祇園	円山、左阿弥、東山側の電車通り、場末の寄席のような芝居小屋、東三楼	電報祇園の茶屋々々の燈り、四条のけば〳〵しい橋、南座、燈りがまばゆいばりにきら〳〵		
第三の十四	衣笠村、衣笠山、金閣寺の森、鷹ヶ峰、愛宕山、叡山、花園の妙心寺、太秦の広隆寺、蚕の宮、御室の仁和寺、鷹ヶ峰の光悦寺、紫野の大徳寺、新京極、西陣京極、千本通り、岡崎の大学、飛同志社の大学、飛行機の発動機、椿寺、一条通り、大将軍、大将軍		電車、電車、飛行機	紺絣の着物にセルの袴、切硝子の鉢、赤い更紗の風呂敷	
第三の十五	平安神宮の前の広い静かな通り、衣笠村の家、花見小路、高台寺、安井神社、花見小路の家、花見小路の茶屋、衣笠村、椿寺	カフェー、茶屋、茶屋、カフェー、場末の寄席のような芝居小屋、講談（蝮のお政）高台寺の方の料理屋	電車（祇園の石段下）、電話、電話、電話、車	祇園の三流芸者	
第三の十六	衣笠村、衣笠村、祇園の夜桜、嵯峨の櫻、御室の八重櫻、島原の道中、壬生狂言の興行、				

	祇園、東山の新緑、八坂の塔、清水の塔、金閣寺の方、衣笠村、新京極、七條駅					
第三の十七	鞍馬の火祭、石段下、叡山、出町、丸太町、北野、衣笠村		自動車の強い光、出町の終点（一番の電車）、丸太町、北野行、電報			
第三の十八	御前通り、衣笠園、衣笠園、北野		電話、自働電話			
第三の十九	寺町、花園の霊雲院、霊雲院、衣笠村	三條の青年会館（演奏会、シューバートのエールケーニヒ、コントラルトの唄、シューバートの音楽）ゲーテの詩、メーテルリンクの「タンタジイルの死」、エールケーニヒ、シューバート、エールケーニヒ		シャボン、ブラッシ		
後篇						
第四の三	京都駅、衣笠村、烏丸通り、東本願寺、六角堂、衣笠村		汽車、汽車、電報、汽車、市内配達、電車通り、電車			
第四の六	北野天神、上七軒、烏丸の御所の角、岡崎、東山、松原、将軍塚、知恩院、丸山、粟田口	八百屋お七、金色夜叉、不如帰、動物園の前、公園の運動場、自転車競争の練習、自転車、藤原時代の盛花をする器	一條通、下の森から京電、武徳殿の裏から終点、千本通から市電、千本の終点、電車、人力、大津からの電車、広道の停留場、停車場、大津からの電車	赤色のシャツ		
第四の七	丸山、高台寺の下清水の方、二年坂、深草、ダラ〳〵坂、東山松原停留所	四条の額茶屋	飛行機			
第四の八	衣笠村					
第四の九	七条駅		汽車、京都行の列車			
第四の十			蝮のお政			
第四の十一	衣笠村、妙心寺、嵐山、亀岡、保津川、愛宕、衣笠		三時三十六分鳥取行、五時三十二分の城崎行、花園駅から鳥取行、花園駅			

一覧表によると、〈京都〉と対応するのは、後篇「第三の一」～「第四の十一」（以下、後篇の記載は省略する）である。そこには、寺社仏閣だけではなく、カフェー、百貨店、市電などの近代的な表現が頻出しているのに気づく。

『暗夜行路』「後記」[1]によると、それらが『改造』に掲載されたのは大正一一年一月～昭和二年一一月だと確認出来る。

次に、志賀直哉には作家活動を中心とした「志賀直哉日記」[2]（以後、「日記」と表記する）が存在するので、その「日記」の〈京都〉に関する記述を全てピックアップし、整理すると左記のようになる。

【「志賀直哉日記」と〈京都〉　太字は近代性を表象したもの】

明治四十一年三月二十九日～四月八日（友人との旅行）

明治41・3・29　宇治平等院の鳳凰堂、宇治上神社、黄バク山、三條小橋の吉岡家、**新京極**

3・30　祇園、清水、知恩院、三十三間堂、**博物カン**、方広寺、血天井

3・31　叡山

4・1　**疎水**、**花見小路の都踊**

明治四十五年四月十日～四月二十四日（著者二十九歳、尾道時代）

明治45・4・10　三本木、**展らん会場**、**都おどり（五番）**

4・11　**会場**

4・12　**開会日**

4・13　房の家

4・14　**新京極　都おどりの四番の組（五番）**

4・15　金閣寺（元信の観山拾得、若沖の鶏、庭）花園、**汽車**、亀岡、保津川下り嵐山、**蓄音機**の会

4・16　岸勇の茶席、**踊りは一番の組**

4・17　**展らん会**、**都おどり二番の組**

4・18　**四条の橋**、房の家、**都おどり三番の組**

4・19　**汽車**

4・20　**展らん会**、**都おどり五番**、房の家、花見小路

4・21　**展らん会**、**四条の橋づめ**、「よし信」「みどり」

4・22　**図書館**、祇園、車、円山の肉屋、**四条**、**電話**、房の家

4・23　瓢亭、壬生狂言

4・24　房の家、車

大正元年八月一日～八月十三日（尾道生活時代）

大正1・8・9　**汽車**、**汽車**、福島？　といふ医者、馬、車

8・10　大瀧の桜湯、**矢尾政**、房の家、**電話**、東山、五条の郵便局、房の家

8・11　みどり、房の家、枡家、車、ユカ、ユカ、ユカ

8・12　湯、千茂登の料理、車、房の家、**先斗町から菊水橋を渡りきつた所（ボンヤリした軒燈）**、房の家

8・13　**急行**、枡家、停車場二階のレストラーン、**汽車**

大正十一年十月十九日～十月二十九日（著者三十九歳、我孫子時代、『暗夜行路』篇刊行、後篇連載）

大正11・10・19　信楽

10・20　粟田口三条坊の楢原、一休庵、名倉屋、**活動写真**、メーセン屋、**南座**（パブロワ）

10・29　信楽、吉田、翁

大正十二年三月八日～六月十四日（著者四十歳、京都山科時代）

大正12・3・8　**タクシー**、粟田口の家

3・9　清水

3・10　**動物園**、信楽、美濃庄、**新京極**、井民

3・11　**京極（活動写真）**

3・12　仏光寺、**自転車**、**いゝ自転車**、寺町、**新京極**、**四条通り**、電報

3・13　**改造社員**、**幼稚園**、仏光寺

3・14　**京都座（露西亜人の演芸団）**

3・15　**岡崎公園（ベースボールマッチ）**、南禅寺北の坊（自分の旧居）

3・21　宮崎タンス店、**京極（愚かなる妻）**、**自転車八十五円**

丸善より**郵便局**、内藤の家、かぎや、骨とうや（**英国製の小鉢**）、加茂、**電話**

3・22　瓢亭、「こがね」といふ家、**汽車**

3・25　太秦の広隆寺（不空ケンサク、桂宮院、如意輪観音、聖徳太子の真筆）妙心寺、衣笠園、北野、**自転車**、山科、安来節の寄席

絵画専門学校（展らん会）、**新京極（活動「朝から夜中まで」）**

3・26　**博物館**、信楽

3・27　**動物園**、**新京極**の氷屋

3・28　**新京極（寄席）**

3・29　車
4・1　信楽、車
4・2　円山、清水、都踊り
4・3　南禅寺、虎（探幽の水呑）元信、都ホテルのわきより粟田山、
4・4　将軍塚、円山、一休庵、南座（健闘家と柔道　家の試合）、新京極、寺町二条
信楽、カギヤ、井民、自動車
4・6　南禅寺、大徳寺（真珠庵、孤蓬庵の不昧公好みの茶室、その他
4・7　二つ茶室）、真珠庵、ロイアルカッフェー、都踊、しるこや大原（自動車）
4・8　博物館、清水を通り阿古屋茶屋の隣の瀬戸物屋、わらんじ屋、汽車
4・9　京都駅、自動車、柊家、青年館
4・13　山科の下郷別荘の園遊会
4・14　自動車で柊屋、金閣寺、御室、嵐山、太子堂、瓢亭、都踊り、井民、電話、新京極
4・16　六角堂、東本願寺、三十三間堂、一休庵、大徳寺（茶室）、
4・17　第一楼（すつぽん屋）柊屋、電車、通天　博物館　五条坂の竹泉　道八の家
4・18　博物館、都踊り
4・19　茶漬屋
4・20　特急　京極（活動）、瓢亭、汽車、停車場
4・21　公会堂（ホルマン）
4・23　円山、清水、博物館（牧渓）、井民、電話　四條通り
4・24　大丸、京極（活動）
4・25　大丸、錦から京極、安来節の寄席
4・26　支那料理
4・27　高島屋　新京極（活動写真・自活する女、「Ｍｙ　Ｂｏｙ」）
4・28　博物館（法然の誓文弟子の署名、牧渓の鶴）、阿古屋茶屋、
4・29　円山の瓢樹、
寺町、新京極、四條小橋
4・30　活動（「ユーモレスク」）落語（松鶴）
5・1　聖マリヤ幼稚園、岡崎の方の教会、大丸、京極食堂、京極
5・2　（団司の義太夫）
落語の寄席
5・3　博物館（探幽の牡丹の小品、（ビシャ門堂出陣）、萬福寺の大雅の唐紙）黒木の宿の玉川楼
5・4　博物館、大丸、錦、京極食堂、いろは旅館、鴨川踊
5・5　宇治、山越しに南郷
5・6　石段下、新京極（活動写真）
5・7　水源地（つゝぢ）寺町、三條通り、団司の加賀見山、東広（油屋）
5・8　車、鉄道便取扱所、玉川楼、博物館（牧渓は鶴、観音・俗、
5・9　猿・露骨、松の枝・上手）、新京極（落語）橋本の家、嵯峨（シャ迦堂の裏の田園）、法筐筐院（夜食）、嵐山
5・10　「血と砂」の活動写真
5・11　活動写真
5・12　青年館、スツポンや
5・13　汽車、宇治、公会堂（クライスラー）
5・14　三條郵便局、一休庵、清水寺、クライスラー、四条
5・15　銀行、カッフェロイヤル、青年館、鴨川踊り
5・16　太秦の法運院、嵐山　汽車
5・17　枳穀邸、瀬枕居、東本願寺、西本願寺（飛雲閣・秀吉芸術）
5・18　麥僊の画室　麥せんの家　妙心寺（キ宗皇帝の鶴）
5・19　特急　動物園（パラダイス）
5・20　高木医師、幼稚園、一休庵、汽車、電話

5・24	大野某の油絵、夷座、電話、活動　高木医師
5・25	南禅寺（永徳の梅に雀、（竹もある）の唐紙に感心）
5・26	マリ天境内の豆腐料理、法然院、銀閣寺（大雅の屏風）、黒谷の方
5・28	博物館（李紬　空海　梁楷　牧溪　顔輝　如拙　相兆雪舟、元信、宗達、呉道子（寺傳））
5・31	小勝の落語
6・1	高台寺、博物館、四条通、本屋、支那料理
6・2	公会堂（宝塚少女歌劇の切符）、画の会（素然筆明奴出塞図、
6・3	郵便局、岡崎公園（ダイヤ倶楽部と立命との野球試合）、円光大師略伝、古画略伝と古画備考
6・4	博物館（蘭蟲の仔）、新京極（小勝の落語）
6・5	高台寺
6・6	片山春女
6・9	博物館（相阿弥）、南禅寺無隣庵（愚庵和尚の遺墨展覧、愚庵の擬古）、四条通り、寺町
6・10	電話、安井の宿屋、嵯峨（履信さん）、二尊院、去来墓、落柿舎、亀山公園（千鳥）、島原（輪違屋、太夫の杯事）
6・11	博物館
6・12	京極（服、活動写真）、高台寺
	寺町、丸太町（錦鯉）、新京極（活動）
大正十三年一月二日〜一月五日〔著者四一歳　京都山科時代〕	
大正13・1・2	天寅（夕食）
1・3	新京極
1・4	疎水、三条、新京極（活動写真、幽芳集）、蠣船（食事）
1・5	車夫
大正十五年一月七日〜四月十一日〔著者四三歳　奈良時代〕	
大正15・1・7	京都
1・26	七時半京都着　駅前
1・30	京都に行く（高台寺、吉田）
2・28	汽車・京都
3・10	汽車・京都、汽車にて稲荷より、楽友館
3・26	丸善
3・28	動物園、博らん会、新京極松竹座
4・5	京都・都おどり
4・9	宇治・平等院より川を渡り興聖寺、都おどり

志賀直哉は明治四一年三月二九日から四月八日まで友人との旅行で京都に滞在し、「尾道時代」の明治四五年四月一〇日から同二四日、大正元年八月一日から同一三日には度々京都に立ち寄っている。「我孫子時代」の大正一一年一〇月一九日から一〇月二九日は『暗夜行路』前篇を刊行し、後篇の連載が始まった時期にあたる。大正一二年三月八日から六月一四日には我孫子を去り、京都市外の山科に移っている。

大正一三年一月二日から五日までの日記には、正月五日間の京都での行動が詳述され、大正一五年一月七日から三〇日までの日記にも断片的に京都へ行った時の様子が記されている。志賀は明治四一年三月末から大正一五年一月まで、小旅行も含めて六度も京都に滞在しているのである。

「日記」の一覧表を見ると、表記が一番多いのは大正一二年で、〈京都〉の項目の半数以上を占め、その大部分が後篇「第三」と対応している。

二、『暗夜行路』後篇の時代背景

では、後篇「第三」「第四」は、どのような時代として位置づけられるのだろうか。

阿川氏によると、謙作は「大正初年を舞台に生活してゐる」とする。果たして、後篇は「大正初年」だけを対象にしているのだろうか。確かに、「大正初年」あたりの〈京都〉は多く表象されている。そのことを『京都名所地誌』[3]の記述から確認したい。

車駕東遷後の京都は一時人心萎沈、市中衰微の兆明らかにして（略）爾来更正の意気を以て商工業の発達年々顕著となり、殊に明治二十三年疎水運河の開鑿以来、交通の便利と各種工業の隆盛を促進し、同廿八年には第二回勧業博覧会の開設あり、更に同四十五年第二疎水竣成して所謂三大事業の完成するや、一躍異常の発展を見るに至れり。（略）／大正四年十一月、大正天皇御即位の大禮及大嘗祭を京都に於て行はせられ（略）以後京都市は（略）市区の膨張を促し、（略）道路擴築、電気軌道の敷設は現に着々実現せられつゝあり。現今文化日新の発展と共に大都市京都の面目亦日に惟新たなるを見るなり。

（但し、傍線は筆者による。以下同じ）

「車駕東遷後の京都」は、「人心萎沈」し、「市中衰微の兆」が「明らか」であった。しかし、「疏水運河の開鑿」により、「交通の便利」「工業の隆盛」を促進し、「第二回勧業博覧会」が開設された。明治「四十五年」には「第二疏水」が竣成し、「三大事業」が完成し、「一躍異常の発展」をみる。また、「大正四年」には「大正天皇御即位の大禮及大嘗祭」が行われ、以後、「京都市」は「市区の膨脹」を促し、（略）さらに、「道路擴築」「電気軌道の敷設」は「現今文化日新の発展」と「大都市京都の面目亦日に惟新たなるを見る」としている。

このように、首都の座を東京に明け渡した後の〈京都〉は衰退の徴候が明らかになるが、やがて疏水事業、道路擴築、電気軌道の敷設の三大事業と博覧会、大正天皇の即位等により、近代都市・京都が開花したのである。

確かに、京都は三大事業により都市文化が花開き、それによる道路拡張、市電、疏水、博覧会、御所の記述は多く見られる。しかし、後篇「第三」「第四」が『改造』に掲載されたのは大正一一年一月～昭和二年一一月で、それらの記述は「日記」の大正一二年の記述と対応している。これはどう考えるべきであろうか。この大正末年から昭和初年という年代を確認するため、『近代京都の名建築』[4]の記述を掲載する。

一九二〇年代は西洋的な文化が生活全般に浸透する時代でもある。そのなかで商業建築、さらには住宅の洋風化が

著しく進展する。

「一九二〇年代」（大正九年～昭和四年）は「西洋的な文化」が生活全般に浸透する時代で、「建築」「住宅の洋風化」が「進展」した時代だとされる。また、南博氏の『昭和文化』[5]には、「昭和の初期の時代は、文化生活が営まれ、モダニズムと呼ばれる文化現象を生み出した時期である」とされ、村嶋歸之「カフエー考現学」[6]でも、「活動写真の看板を囲繞する無数の電灯や、カフエーの表のネオン・サインなど、盛り場一帯は、天上の星よりも遙かに多数の電光で包まれ、今にも燃え出しさうに見える」とされる。このように、「大正後半から昭和初期の時代は、「モダニズム」という「文化現象」を生み出した時代で、「多数の電光で包ま」れ、「近代都市」が生成してゆく時代だとみることが出来る。

三、都市の拡張と公共事業

一、道路とその拡張

では、『暗夜行路』後篇の〈京都〉像とはどのようなものであろうか。「日記」と比較しながら検証していきたい。

後篇「第三の一」には、道路の拡張が次のように記載されている。

川に望んだ東三本木（ひがしさんぼんぎ）の宿へ引き上げて来たのである。

（略）新しく出来た河原の広い道で男女の労働者が川底から揚げて来た砂利を大きさに従つてふるひ分けて居る。

主人公・時任謙作は、京都に辿り着き、家探しのために「東三本木」[7]に投宿する。「東三本木」は、「東三本木通が南北に通る上之町・中之町・南町一帯」で、「鴨川の西側に位置」し、かつては「遊離」だったとされる。「日記」に「信楽」が二回も表記されているので、「東三本木の宿」とは白樺派の文人達の集会場だった「信楽」であろう。道路の拡張は『京都名勝誌』で、次のように記されている。

社会の進歩と都市膨張とに伴ひ、道路拡築の必要起り、電鉄道路線増築の計画を立て、明治四十年十一月より工事に着手し、大正二年五月に至り、第一次道路拡築工事竣工せり、（略）竣工の後は頓に市街の美観を加へ交通便易となり、面目を一新して正に文明都市となれり。

「工事」の「竣工」後は「交通便易」となり、「文明的都市」となったこと記されている。

謙作は、「新京極」に面した「四条通り」「寺町通り」にも度々足を運んでいる。

・四条通りをお旅（たび）まで行き、新京極（しんきやうごく）の雑踏を人に押されて抜けながらも彼の心は静かだつた。そして寺町を真直ぐに

丸太町まで歩き、宿へ帰つて来た。　（「第三の一」）

・謙作は町へ出れば大概寺町を真直ぐに下がるのが癖のやうになつてゐた。そして今もその道を歩きながら、矢張り、彼は無心ではなかった。　（「第三の九」）

ここでは、「四条通り」「寺町」は「癖」になるほどよく通ったとされ、謙作が河原で見初めた直子と遭遇すると、その心は「静か」になる。しかし、祖父の愛人で、祖父の死後同居したお栄が訪ねてくると「無心」ではなくなるのである。「四条通り」は「第三の二」にも描かれるが、「新京極、祇園、先斗町」に面し、「買物の便」の良い「目貫の大街路」[8]とされる。

「千本通り」も二度表記されている。

・夜は夜で、電車に乗つて新京極の賑やかな場所へもよく出掛けた。近くでは「西陣京極」と云はれる千本通りのさう云ふ場所へも行つた。　（「第三の十四」）

・彼は千本通りから市電に乗るつもりで上七軒へ入つて行つた。（略）「自分は又放蕩を始めはしないだらうか。」彼は両側の掛行燈の家々を見ながら、不図、こんな事も思つた。　（「第四の六」）

「千本通り」[9]は嘗ての朱雀大路で、花街の「西陣京極」「上七軒」に通じている。謙作は花街に近づくと、「又放蕩を始めはしないだらうか」と感じてしまう。

「一条通」は「第三の十四」にも見られるが、「第四の六」には、

翌日謙作は一条通を東急ぎ足に歩いてゐた。南風は生暖かく、肌はじめ〳〵し、頭は重かつた。天候もあり、勿論寝不足の故もあつたが、その割りには気分が冴え、気持は悪くなかつた。つまり彼はしんで亢奮して居た。只、落ちついて物が考へられなかつた。断片的に色々な事が恰もそれが廻転してゐるもののやうにチラ〳〵と頭にひらめくばかりだつた。

とされる。「一条通」は平安京の一条大路にあたり、東は烏丸通、西は花園付近までの通りである。直子と従兄弟・要との不貞を知ると、謙作は「一条通」を急ぎ足で歩くが、その時「南風は生暖か」く「肌はじめ〳〵」し、「亢奮」して「落ちついて物が考へられ」ない状態になる。

「第四の三」には「烏丸通り」[10]も表記され、「烏丸通りを真直ぐ北へ走つて行つた。電車が幾台も追越して行つた」とされる。「烏丸通り」は一八七七年に京都駅が出来てから駅正面の大通りとなり、天皇が京都御所へ行くための通路として拡幅された。京都御所の西端を通り、京都駅を南北に交差するため、平安京の朱雀大路であった「千本通り」に代わって、京都のメインストリートになった。

このように、謙作はあちこちの通りを歩くが、その度に好悪の感情が揺れ動く。通りは謙作の精神状態を示すバロメーターとして機能しているのである。

二、琵琶湖疎水

後篇「第三」には疏水・インクラインの記述が見られる。

・南禅寺の裏山の中腹から、疏水の上へ出て、それからインクラインを見、瓢亭といふ家に寄つて夜の食事をした。

（「第三の九」）

・南禅寺の裏から疏水を導き、又それを黒谷に近く田圃を流し返してある人工の流れについて二人は帰つて行つた。

（「第三の十二」）

疏水は、豊田多八『京都の歴史』[11]において、「我国最初の水力発電事業」であり、明治四十年の「京都市三大事業」の一つで、「道路を拡築」するための重要な産業政策であったことがわかる。インクラインは、「陸舟によりて上下し運輸の便を運航するために敷設」された「傾斜鉄道の跡地」である。双方ともに京都近代化の象徴的な事業であるが、謙作と直子はそれらを散策のコースとして利用した。しかし、新婚であるにもかかわらず、それを「人工の流れ」だとし、やがて訪れる夫婦の不和を暗示しているようである。

三、電気鉄道

電気鉄道も、後篇「第三の一」に表記されている。

橋の袂から、彼は東山廻りの電車に乗つた。丁度涼み客の出盛る頃で電車は込んでゐた。彼は立つた儘、祇園の石段下まで行つて、其所で降りた。（略）四条通りをお旅まで行き、新京極の雑踏を人に押されて抜けながらも彼の心は静かだつた。

謙作は「橋の袂」から「東山廻りの電車」に乗り、「祇園の石段下」で「降り」る。

「祇園の石段下」の開通は、「京都の市電」[12]に、次のように記される。

八坂神社の西楼門にぶつかる四条通りは、市電の開通する大正6年1月以前までは、わずか幅三間の道であった。（略）祇園のひとたちのバックアップで、四条大橋が竣工。道路が広げられ、四条小橋まで運行していた市電が石段下まで開通。同時に現在の東山線の東二条、南に下って渋谷通りまで市電が走ったのである。

「四条大橋」の「竣工」で「幅三間の道」が拡張され、「四条小橋」まで運行していた市電が「石段下」まで開通したのは「大正6年1月」である。謙作は大正六年以降に東山廻りの電車に乗車したことになり、先述の阿川氏が指摘した「大正初

年」という年代とは微妙に差異が見られる。

「三の十七」にも、京電や市電の表記が見られる。

京都へ入る頃は実際水谷が云つたやうに叡山の後ろから白ら〴〵と明けて来た。出町の終点で四人は暫く疲れた体を休めた。（略）謙作だけは丸太町で皆と別れ、北野行に乗換へ、そして秋らしい陽ざしの中を漸く衣笠村の家に帰つて来た。

大正時代から昭和初期にかけて出町～丸太町間の電気鉄道が見られるのは京電（京都電気鉄道）の出町線[13]である。出町線は明治三四年三月一一日に、中立売線の寺町丸太町の交差点から寺町通りをそのまま北方向に路線延長し、青竜町（出町）まで開通した。実際の電停は、阿川氏が指摘する丸太町ではなく、寺町丸太町である。出町線は中立売線との乗り入れはなく、支線扱いとなり、出町～寺町丸太町間を折り返し運転された。「北野行に乗換へ」というのは、堀川線（通称：北野線、N電）のことである。それは、下ノ森～北野間が明治四五年に延伸されたので、京電・北野行きに乗り換えたのである。

京電の記述は「第四の六」にも見られる。

下の森から京電に乗る習慣で、その方へ行つたが、丁度北野天神の縁日で、その辺は大変な人手だつた。彼は武徳殿の裏から終点の方へ行つた。然しそこも大変な人で、（略）彼は千本通から市電に乗るつもりで上七軒へ入つて行つた。（略）千本の終点からは楽に乗れた。（その頃其所が終点だつた。）（略）そして烏丸の御所の角まで来ると、急いで電車を飛降り、其所の帳場から人力に乗換へた。（略）岡崎の下宿では玄関に立つと、偶然二階から馳け降りて来た末松と向ひ合つた。（略）謙作はその路地を出た。道の正面に近く見える東山は暗く霞み、その上を薄墨色の雲が騒しく飛んでゐた。（略）大津からの電車に乗ることにし、其所のベンチに二人は腰を下ろした。（略）大津からの電車は中々来なかつた。

「京都の市電」によると、「下の森から京電に乗る」路線は、京電・堀川線である。駅名は「下の森」ではなく、「の」がカタカナ表記の「下ノ森」で、終点は北野である。下ノ森～北野間が開通したのは、明治四五年五月一〇日である。下ノ森が混雑していたので、謙作は「武徳殿の裏から終点」に行く。武徳殿の前は下ノ森で、そこから終点の北野へ回ったのである。そこも「大変な人」で、今度は「千本通から市電に乗るつもりで上七軒」へ入って行く。北野天満宮の鳥居は、数百メートル南の下ノ森にあった。

では、「千本通」からの市電とはどの路線を指すのだろうか。阿川氏は「今出川通りを東西に走る市電は、千本・烏丸

間、大正元年の十一月と十二月、二度に分けて開業、全通してゐる」[14]とし、氏は「千本・烏丸間」だと指摘する。実際には大正元年一一月一一日に市電・今出川線の大宮今出川～千本今出川間が開通し、同年一二月二五日に大宮今出川～烏丸今出川間が延長した[15]。従って、「千本通から市電に乗る」というのは、千本今出川から市電に乗り、烏丸今出川で下車したことになる。それは、「烏丸の御所の角まで来ると、急いで電車を飛降り、其所の帳場から人力に乗換へた」という記述からも明らかである。烏丸今出川の前は「烏丸の御所」であるので、「烏丸今出川」で下車し、人力車に乗り換えたのである。

では、「大津からの電車」とはどのような電車であろうか。『京都市電が走った街今昔』[16]によると、

京阪電鉄京津線は、前身である京津電気鉄道が三条大橋～札の辻間で大正元年八月一五日に開業したのが始まりとなっています。開業当時三条通上にあった三条大橋駅は、大正一四年に京阪電鉄本線が五条から三条まで延伸された際、現在の場所へ移転され、大正一四年に京阪電鉄が京津電気軌道を合併したおりには、本線の三条駅に併合されました。

とし、京津電気鉄道の開業は「三条大橋～札の辻間」で「大正元年八月一五日」であったことがわかる。起点の三条大橋は岡崎の近くに位置し、その向かい側は東山にあたる。「札の辻」は大津市に属すので、「大津からの電車」とは三条大橋駅を起点とした京阪電鉄京津線の電車である。

「第四の十一」には鳥取行きの汽車が表記されている。

謙作はいよ／＼旅へ出る事にしたが、普通の旅とは心構へが異ふだけに出発際（たちぎは）が何となく妙だつた。

「何時でもいいんだ。どうせ一日で山までは行けないんだから……」彼は出来るだけ暢気らしい風をしてこんな事を云つてゐた。彼は旅行案内を見ながら、

「三時三十六分鳥取行か。若しそれに遅れたら五時三十二分の城崎行でもいい」

この記述について、阿川氏は前述の『志賀直哉』で、

京都発午後三時三十六分の鳥取行、五時三十二分の城崎行、そんなものは大正四年五年六年頃の「旅行案内」、いくら探しても載つてはゐない。（略）「暗夜行路」の此の部分が執筆された昭和二年には、まさしく此の通りの鳥取行２０９列車城崎行２１１列車が運行されてゐる。／つまり、主人公をどんな汽車で大山へ発たせたらいいか、思案してゐた作者が、家にあるその年の『旅行案内』を開いてみたら、偶然山陰本線下り２０９列車と２１１列車が眼につき、これを使はうと思ひ決めたのだ

と想像される。「三時三十六分」「五時三十二分」、どちらも京都駅発の時刻だから、謙作が実際に乗車する花園駅発車はそれより十数分あとになるけれど、ともかく何時何分発何処行とはつきり書き入れることによつて、会話にリアリティが出て来た。その代り、大正初年を舞台に生活してゐる作中人物が昭和二年の時刻表で旅する矛盾は見落されてしまつた―

としている。氏は、「京都発午後三時三十六分の鳥取行、五時三十二分の城崎行、そんなものは大正四年五年六年頃の『旅行案内』、いくら探しても載つてはゐない」とし、「大正初年を舞台に生活してゐる作中人物が昭和二年の時刻表で旅する矛盾は見落されてしまつた」と述べる。しかし、後篇「四の十一」は、昭和二年一一月一日発行の『改造』に掲載されているので、昭和二年あたりの〈京都〉像が表象されているのではないか。大正一〇・一二年の『公認汽車汽船旅行案内』[17]を調べると、「城崎行」はどちらも「五時三十一分」に発車されるが「鳥取行」は運行されていない。しかし、大正一六年、つまり昭和二年の「鳥取行」は京都発「三時三十六分」、「城崎行」は「五時三十八分」であり、四分遅いの運行であったことが確認できる。従って、『暗夜行路』には、大正一六年（昭和二年）の『旅行案内』の記述を参照したのだと思われる。

四、近代都市〈京都〉

一、公共施設―博物館・大学・教会・公園

「博物館」は「第三の二」に表記されている。

すぐ電車で博物館へ向つた。（略）古い掛け物の絵（略）如拙の瓢箪鮎魚図の前へ来て、それは日頃から親みを持つてゐたものだけにさ暫く見てゐる内にその絵の為めに段々彼の気持は落ちついて来た。

「博物館」は「段々彼の気持は落ちついて来た」と、謙作の心を落ち着かせるものとして描かれる。既述の『京都名勝誌』には、

東京、奈良の帝室博物館と共に宮内省に属せしが、大正十三年十一月二十六日、東宮殿下御成婚紀年として皇室より京都市に下賜せられ、同年十二月より恩寵京都博物館と改称す。本館は明治二十八年竣工す。（略）館内には多くの名画彫刻、工芸品等を陳列せり。

とされ、博物館は「明治二十八年」に竣工したことがわかる。「博物館」は「日記」には実に一二回も表記されているが、本文では京都に来てからすぐの一度のみ表記されている。「博物館」は精神の安定を図るメタファーとして用いられたものであり、妻の不義で懊悩する主人公には不必要な素材だったので、

最小限度に止めたものと言える。

展示の「如拙」の「瓢箪鮎魚図[18]」は、退蔵院で国宝に指定された「瓢鮎図」であり、「日記」にも「博物館」「如拙」の記述が見られる。それは、大正一二年五月二六日の記述であり、「大正初年」ではない。

「第三の十」「第三の十四」には、町衆の近代化を示す「大学」の記述が見られる。

・その手紙にN老人の息子の友達で或る私立大学の文科にゐる人があつて、それから謙作の評判を聴き皆も喜んでゐると書いてあつた。（「第三の十」）

・其頃丁度中学では謙作より二つ下だつたが、家の近い所からよく遊んで居た末松が、岡崎のある下宿に来た。四五年前に此所の大学に入つたのだが、病気の為めに二年程休んで、未だに年の半分位づつ東京から出て来ては残つた試験を受けてゐる。（略）／「水谷君も文科で今年大学へ来るんだ。僕にはよく分らないが詩でも歌でも何でもやるよ」（略）／「久世君といふのはどう云ふ方？」と直子の方を向いて訊いた。／「要さんの御親友で、同志社の大学にいらつしやる―そら！　貴方も誉めていらつしやる方よ」

ここには、「或る私立大学の文科」の「岡崎」周辺の「大学」と「同志社の大学」の記述が見られる。『京都の歴史[19]』によると、

四本柱の第二は学問及び教育でありまするが、（略）私立学校の同志社は、早くも明治八年に開かれました。又、二十二年には、第三高等学校が大阪から移転して来る。三十年には我が京都帝国大学が開設せられる。（略）実に文字通り、京都は関西に於ける学問教育の中心地となつて参りました。

とし、明治八年には同志社が、同三〇年には京都帝国大学が開設されたことが分かる。『京都名勝誌』には、京都帝国大学（明治三〇・六）、同志社大学（大正九・四）、龍谷大学・大谷大学（大正一一・五）、立命館大学（大正一一・六）が旧制大学として掲載されている。この中で「或る私立大学の文科」とは、前掲の「同志社大学」であり、「岡崎」周辺の大学は「京都帝国大学」である。

「第三の十九」には、青年会館の記述が見られる。

彼がそれより何となく気になつて居たのは、赤児の誕生日の夜、前からの約束で末松等と三条の青年会館に演奏会を聴きに行つた、其所で彼はシューバートのエールケーニヒを聴いた、その事だつた。彼は前から曲目をもつとよく見て居たら、此演奏会へ行かなかつたらう。この嵐の夜に子供を死神にとられる曲は今の場合、聴きたくなかつた。

然し彼は何気なく行つて、誕生の日に聴くには如何にも縁起の悪い曲を聴くものだと思つた。彼は一寸嫌な気持になつた。

浅井虎夫『新京都めぐり』[20]によると、「青年会館」は「耶蘇教会堂　市内に存する者左の如し　基督教青年会館　三条通柳馬場角中之町」との記述が見られる。本文にも「三条の青年会館」の記述が見られるので、これは、今なお現存する三条の「キリスト教文化会館」である。

野村武夫『京都ＹＭＣＡ七十年史』[21]には、

開館以来、主たる事業が体育、教育の分野であったが、その分野の参加者が増加し、会館に出入りする人々が多くなったことによって、会員事業と呼ばれるプログラムが盛りあがりをみせる。その種類も多岐にわたり、宗教部、音楽部の活動、講座、講習会、研究会、講演会、その他の活動などにひろがっている。

とされ、「音楽活動」も行われていたことがわる。「シューバートのエールケーニヒ」[22]は、「魔王」とも訳され、「嵐の夜に子供を死神にとられる曲」である。これを誕生の日に聴くには如何にも縁起の悪い曲であり、赤児の死の複線として設定されたのである。「青年会館」は大正一二年の「日記」に掲載されている。

「第三の十五」「第四の六」には、「平安神宮」「動物園」「公園」の記述が見られる。

・二人は間もなく寒い戸外に出たが、其時はもう九時を過ぎて居た。平安神宮の前の廣い静かな通りを真直ぐに電車路の方へ歩いた。（「第三の十五」）

・岡崎の下宿では玄関に立つと、偶然二階から駈け降りて来た末松と向ひ合つた。（略）／「動物園の前で待つてゐる――人を連れて来ちやあ困るよ」／謙作はその路地を出た。道の正面に近く見える東山は暗く霞み、その上を薄墨色の雲が騒しく飛んでゐた。変に張りのない陰気臭い日だつた。／公園の運動場で自転車競争の練習をしてゐる若者があつた。赤色のシャツ、猿股の姿で、自転車の上に四ッ這ひになり、頭を米搗機械のやうに動かしながら走つてゐた。向ひ風では、上體を全體右に左に揺り動かし、如何にも苦しさうだが、再び追ひ風に来ると、急に楽になり、早くなる。謙作は往来端に立ち、少時それを眺めてゐた。（「第四の六」）

既述の『京都名勝誌』によると、岡崎公園は、

内に市公会堂、動物園、工芸館、図書館、第一第二勧業館、岡崎グラウンド等を包含せり。（略）二十八年平安神宮を創建し、第四回内国勧業博覧会開催に当り、会場を此地に定め、土地の大部分を買収して敷地に充てたり。

三十七年七月残り空地を開きて公園と為し、漸次設備を完成して今日に至る。

とし、「第四回内国勧業博覧会開催」を機に造成されたことがわかる。そこには、京都のシンボルとして「平安神宮」が造営され、「動物園」「グラウンド」等も出来た。「第四の六」での「運動場」には、モダンな「赤色のシャツ」の「自転車競技の練習をしてゐる若者」の姿が見られる。これらの娯楽施設は「日記」には、大正一二年に記載されている。

二、文明の利器——飛行機・自動車・電話・電燈

「第三の十」には、陸軍最初の飛行機の墜落とその展覧の様子が表出されている。

彼は時間つぶしに四条高倉の大丸の店へ行つた。華やかな女の着物を見る、かう云ふ、私かな要求が何所かにあつた。（略）然し又別に、最近、深草の練兵場で落ちた小さい飛行機を展覧してゐる、それも見たかつた。龍岡が、其飛行機—モラン・ソルニエといふ単葉の一を賛めてゐた事がある。そして彼は今日龍岡への手紙にその飛行家が、東京までの無着陸飛行をやる為に多量のガソリンを搭載し、試験飛行をして居る中に墜落し、死んで了つた事を書いた。半焼けの飛行服とか、焦げた名刺とか、手袋とか其他色々の物が列べてあつた。彼が京都へ来た頃、よく此隼のやうな飛行機が高い所を小さく飛んで居るのを見た。町の子供達がそれを見上げ「荻野はんや荻野はんや」と亢奮えてしてゐた事を憶ひ出す。子供ばかりでなく「荻野はん」の京都での人気は大したものだつた。それが今は死に、其遺物がかうして大勢の人を集めてゐる—。

この事故は、大正四年一月三日に起こったもので、その様子は大正四年一月四日・五日付『東京朝日新聞』に、「荻田常三郎の飛行機墜落死」と題して掲載されている。事故の調査は、阿川氏の『志賀直哉』に詳述され、モラン・ソルニエという飛行機の残骸と荻田常三郎の遺品は、大正四年四月一日から十五日まで、四条高倉の大丸で展示され一般公開されたと言及している。さらに、氏は、荻田常三郎が「荻野はん」としているが、それは志賀直哉の間違いではないかと指摘している。氏名については、『東京朝日新聞』の記述にも「荻田常三郎」とあるので、氏の指摘どおりである。

しかし、飛行機の残骸と荻田氏の遺品の展示時期については異論があるので、後で詳述したい。

では、この飛行機の墜落の場面が「第四の六」「第四の七」に亘って設定されているのは如何なる理由であろうか。

・謙作はぼんやり前の東山を見上げてゐたが、府図異様な黒

いものが風邪に逆らひ、雲の上に動いてゐるのに気がついた。そして彼は瞬間恐怖に近い気持に捕へられた。（略）彼の頭にはそれが直ぐ飛行機として来なかたのだ。／機体は将軍塚の上あたりを辛うじて越すと、其儘、段々下がつて行き、仕舞ひには知恩院の屋根とすれすれにその彼方へ姿を隠して了つた。／「屹度落ちたぜ、円山へ落ちた。行つて見ようか」／陸軍最初の東京大阪間飛行で、二人共新聞では知つてゐたが、今日は真逆来まいと思つてゐた。それが来たのだ。

（「第四の六」）

・二人は丸山から高台寺の下に清水の方へ歩いて行つた。何処でも飛行機の噂をしてゐるものはなかつた。朝の新聞で若しそれを見てゐなければ謙作は先刻の機体を幻視と思つたかも知れない。（略）往来を駈ける号外売りの八釜しい鈴の音が聞こえた。／間もなく二人はその茶屋を出たが、出る時、末松は入口に落ちてゐた号外を取上げ、「矢張り先刻の飛行機は深草へ下りたんだね」と云つた。然し、他の一機は無事に大阪へ着いた事もそれに出てゐた。

（「第四の七」）

後篇「第四」は、謙作の妻・直子が従兄弟の要によって犯され、謙作が懊悩するシーンが続く。その中での飛行機は、「府図異様な黒いものが風邪に逆らひ、雲の上に動いてゐる」、「機体を幻視と思つたかも知れない」等とされる。これは直子の不義の伏線として設定されたものだと思われる。

自動車も、鞍馬の火祭の場面で表記されている。

十月下旬のある日、謙作は末松、水谷、水谷の友達の久世などと鞍馬に火祭と云ふのを見に行つた。日の暮れ、京都を出て北へ〳〵、幾らか登りの道を三里行くと、遠く山の狭がほんのり明かるく、其辺一帯薄く烟の立ち込めて居るのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら冷え〴〵とした山気を浴びて行くと、此奥にさう云ふ夜の祭のある事が不思議に感ぜられた。子供連れ、女連れの見物人が提灯をさげて行く。それを時々自動車が前の森や山の根に強い光を射つけながら追い抜いて行く。

鞍馬は京都の外れの山間に位置しているが、このような所にも自動車が走り、「森や山の根に強い光を射つ」け、車社会になりつつある〈京都〉像を表象している。

「六百円の電話」「自働電話」の記述も見られる。

・そんな景気ばかり云つてないで、ちつと、お前さんの資本を此方へお回しなさい」お才は其若い女に揶揄つた。「お前さんの六百円の電話を売つて、それだけでもいいからお回しなさい。

（「第三の九」）

・いつも電話を借りる家はまだ寝静まつてゐた。彼は馳けて

北野まで行き、其所の自働電話で、K医師の自宅にかけ……。

（「第三の十八」）

「六百円の電話」は、今の値段に換算すると、約一六一万円[23]に相当し、かなりの額になる。『電話一〇〇年小史[24]』によると、「大正五年」には「電話市価高騰、高値890円」と記されているので、「六百円」の電話が流通していた時期は、大正五年に近い時期にあたる。

「自働電話」も同雑誌に、次のように記されている。

・明治末期から昭和2年の自働電話は、・・全国で200ヵ所に立てられ、庶民の電話として活躍した、赤塗り六角形ボックス……。

・明治の後半と大正の全期にわたって呼びならされてきた「自働電話」は、大正14年（1925）に「公衆電話」と改称された。（略）「今の公衆電話は、以前には自働電話と言われていた。何等自動的部分のないのに自働電話とは真におかしい名前であった。

これらの記述から、「自働電話」とは「公衆電話」のことで、「公衆電話」と改称されたのは「大正14年」であり、形状は「赤塗り六角形ボックス」だったことがわかる。

「電燈」は「第三の一」にも見られるが、まばゆい燈りは次のとおりである。

其所から四条まで電車で行き、菊水橋（きくすゐばし）といふ狭い橋の袂から牡蠣船に行つた。謙作は尾の道以来の牡蠣船である。（略）あの薄暗い倉庫町の蠣船とは此所は余りに変つて居る。前に祇園の茶屋々々の燈りがある。四条のけば〳〵しい橋、その彼方（かなた）に南座（みなみざ）、それらの燈りがまばゆいばかりにきら〳〵と川水に照反（てりかへ）して居た。

（「第三の十三」）

「菊水橋」は現存しないが、既述の「京都の地名」によると、「かつては高台寺近くの下弁天町のあたりに幅の狭い橋が掛けられていた」とされる。大正元年八月の「日記」には「先斗町から菊水橋を渡りきつた所（ボンヤリした軒燈）」の記述が見られる。しかし、ここでは、「四条のけば〳〵しい橋」、「南座（みなみざ）」の「燈り」が「まばゆいばかりにきら〳〵と川水に照反（てりかへ）」すとされている。従って、この表記は「大正元年」ではなく、大正一三年の「日記」に記された「蠣船」と「四条」の「橋」が反映しているのであろう。「牡蠣船」は、『京都商工人名録[25]』に、島田舜蔵経営の「かき船」（「大和大路四条上」）の表記が見られるので、島田商店の「かき船」のことであろう。「かき船」は、大正四年・八年の『京都商工人名録』には見られず、「牡蠣料理」として「矢尾政」の表記が見られるだけである。従って、「第三の十三」の「蠣船」は、大正一三年一月五日の「日記」〔「蠣船（食事）」〕に拠ったものであろう。

三、商業施設―新京極・西陣京極・南座

後篇「第三」には数々の商業施設が表記されているが、謙作が頻繁に足を運ぶのは「新京極」である。それらの記述を列挙すると次のようになる。

・四條通りをお旅まで行き、新京極の雑踏を人に押されて抜けながらも彼のこころは静かだつた。そして寺町を真直ぐに丸太町まで歩き、宿へ帰つて来た。（「第三の一」）

・其晩二人は新京極へ活動写真を見に行つた。「真夏の夜の夢」を現代化した独逸物の映画を二人は面白く思ひ、晩くなつて二人は、東三本木の宿へ帰つて来た。（「第三の三」）

・晩、三人は寺町、新京極辺を暫く散歩した。そして七條駅で、二人は鎌倉へ帰る信行と別れた。（「第三の六」）

・出掛けるとすれば大概新京極のやうなごたぐした場所を歩き回り、疲れ切つて帰つて来る、さういふ方が多くなつた。（「第三の十」）

・そして夜は夜で、電車に乗つて新京極の賑やかな場所へもよく出かけた。近くでは「西陣京極」と云はれる千本通りのさう云ふ場所へも行つた。（「第三の十四」）

「新京極」は『京都名勝誌』によると、

この處は京洛第一なる繁華熱閙の地にして、演劇、活動写真、浄瑠璃、軍談、落語の各興行場より、酒楼、肉舗。珈琲店、球戯場等前後相望み、各種の商舗また櫛比整列して、遊人填咽、昼夜喧闐雑踏を極む

とされ、「京洛第一の繁華街」であり、「演劇、活動写真、浄瑠璃、軍談、落語の各興行場」であることがわかる。謙作は賑やかな「新京極」に五度も訪れる。散歩途上、心に秘めた女性・直子を見かけた時は、雑踏であっても心は「静か」である。友人の高井とは「真夏の夜の夢」を現代化した「独逸物の映画」を見る。「日記」に見られるドイツ映画は大正十二年に記載された「朝から夜中まで」[26]である。この映画が日本で最初に封切られたのは大正一〇年であり、年代的にも合致する。それは、銀行の出納係が女性の色香に迷い破滅する内容で、「真夏の夜の夢」とも似通っている。鎌倉の兄がやって来た時も案内するが、結婚後は「ごた〳〵した」雑踏が「鬱陶し」くて「疲れ切つ」てしまう。

「西陣京極」は、駒敏郎『京都西陣織屋町』[27]には、「西陣」の「繁華街」という意であるとされる。田中泰彦『西陣の史跡』[28]によると、西陣付近は大正から昭和初期にかけて「日本のハリウッド」として映画館二〇軒以上を有する京都一の大歓楽街で、直ぐ傍に五番町遊廓があり、千本中立売付近から千本丸太町付近まで遊びには事欠かなかった場所であったと表記されている。「新京極」「西陣京極」の活動写真・映画の記述は、「日

記」には大正十二・十三・十五年に表記されている。

「南座」は「燈り」だけではなく、芝居の記述も見られる。

晩は矢張りS氏の案内で南座の顔見世狂言へ行つた。（略）舞台では「紙屋治兵衛」の川庄のうちの場を演じて居た。謙作は何度も此狂言を見てゐたし、それに此役者の演じ方が毎時、余りに予定の如く只上手に演ずる事が、うまいと思ひながら面白くなかつた。（「第三の十二」）

南座では、「紙屋治兵衛」の「川庄のうちの場」が演じられている。『京都名所地誌』[29]によると、

祇園町南側四條大橋の東にある市内第一の劇場（略）元来四條の芝居は其由来極古く、永禄年中江州の浪人名古屋三左衛門なるもの、出雲大社の巫女阿國と云へるものと合同して、一種の狂言を仕組み、祇園社の南門外に於て興行せしに初まる。（略）現今のものは大正二年の建築に掛り……。

とされ、南座は大正二年から建築された洋館の建造物である。謙作が何度も足を運ぶ程の芝居であるにもかかわらず、「此役者の演じ方が毎時、余りに予定の如く只上手に演ずる事が、うまいと思ひながら面白くなかつた」としている。「川庄のうちの場[30]」は、心中の意志がないことを告げた小春に、治兵衛が逆上して刀を障子に突き刺す場面が展開される。これは、妻・直子の不義の複線として描かれたのである。

四、商業施設―百貨店・レストラン・カフェ

「百貨店」「レストラン」「カフェ」も表記されている。まず、「百貨店」は、

彼は時間つぶしに四条高倉の大丸の店へ行つた。華やかな女の着物を見る、かう云ふ、私かな要求が何所かにあつた。（略）然し又別に、最近、深草の練兵場で落ちた小さい飛行機を展覧してゐる、それも見たかつた（「第三の十」）

と、「大丸」が描かれている。

『京都商工大築』[31]によると、「合資会社大丸・四条高倉」は、百貨店　同店は大正三年大丸呉服店整理の当時大阪、神戸商店を株式合資会社に改造せし際当京都店は（略）呉服雑貨の販売に従事せしが、時世の趣向に伴ひて、百貨店組織が大に顧客の歓迎を受くるに至り、（略）大正十年八月祝融に襲はれ全館焼失の厄に遭ひしも直ちに仮館を建築して同年末より営業を継続し翌十一年より十二年に掛け本館の増築をなせり（略）十月を以て華々しく開館するこゝとなれり。

と、大正三年に「呉服雑貨」の販売から百貨店組織になり、「飛行機を展覧」していたとされる。

ここで、後篇「第三の十」の、荻田式飛行機の墜落惨状の展覧について修正を加えていきたい。既述の阿川氏は、その展覧は「大正四年四月一日から十五日である」と指摘されている。しかし、大正三年～五年の「日出新聞」を調査してみると、大正四年二月二日の新聞には、大丸呉服店での展覧は、「大丸と荻田式飛行機」というキャプションで次のように掲載されている。

最後に深草にて壮烈の最後を遂げし飛行家荻田氏助手大橋氏が同乗したる旋風号は其後京大理工科にて研究中なりしが今度大丸呉服店にては冷く其惨状を公衆に示すと共に一般の飛行智識発達の一助として一日より十五日迄三階楼上に陳列して縦覧随意となりしたるが伊崎助手は丁寧に機に就て説明を為す由

展覧の期日は、阿川氏が指摘した「大正四年四月一日から十五日」までではなく、「大正四年二月一日から二月十五日」[25]であることが分かる。さらに、同二月十三日の同新聞には、「二月の大丸」として、「故荻田氏乗用飛行機旋風号本月廿五日迄延期御観覧に供し候」と記載され、「二十五日まで十日間」延期されたことがわかる。大正四年四月一日から十五日までの新聞を確認しても、展覧の記述は見られない。従って、大丸での展覧は「大正四年二月一日から二十五日までの二十五日間」であったことがわかる。

「第三の二」には、西洋料理の表記が見られる。

高台寺の中に貸家が出来つつあるといふ話を憶ひ出し、（略）其儘八坂神社へ出て四条通りを帰つて来た。／四条の橋を渡つた所に、川へ突き出しを作つた安値な西洋料理屋がある。

大正時代、「四条の橋を渡つた所」にある西洋料理屋は「矢尾政」（現在は「東華菜館」）と「レストラン菊水」である。謙作は「八坂神社へ出て四条通りを帰つて来」ている。八坂神社から「四条の橋を渡つた所」となると「矢尾政」である。実際に四条大橋を歩いて確認すると、「矢尾政」は「川へ突き出しを作つた」という表現に合致している。「レストラン菊水」には鴨川沿いの道路を隔てたところにある。

「矢尾政」は『京都商工大築』[32]に、

西洋料理業　明治二十五年頃（略）当時は蠣料理専門なりしが同四十年頃西洋料理を兼営せしより漸次業容の刷新と共に順調なる経過を以て発展し大正十五年十二月（略）合名会社レストラント矢尾政と称す、（略）同十四年十二月店舗の新築に着手、昭和元年十二月竣工、翌二年元旦より華々しく開店せり、該建物はヴォーリス氏監督、（略）スパニツシユルネサンス式鉄筋コンクリート（六階地下室

共）にして家族室五を有し大宴会場は定員二百名を取容し得べく対岸菊水館と鴨川を挟んで四条橋畔の偉観たり、とされ、明治四十年頃から「西洋料理」業として兼営し、大正十四年に店舗を新築し、昭和二年正月には開店している。これは、ヴォーリス設計の近代的建築物で「安値（あんちょく）な西洋料理屋」という雰囲気ではない。「矢尾政」は大正元年の「日記」にも記載されているので、大正元年の古い店を「安値」としたのであろう。

カフェーは「第三の十五」に二度表記され、大正一二年の四月・五月の「日記」にも「ロイアルカッフェ」「カッフェロイヤル」の表記が見られる。

五、結びに

『暗夜行路』が〈京都〉と対応するのは後篇「第三の一」～「第四の十一」である。それらは初出『改造』の「大正一一年一月～昭和二年一一月」に掲載され、その大部分が大正一二年の「日記」と対応している。

阿川弘之氏は、『暗夜行路』の主人公は「大正初年を舞台に生活してゐる」と指摘している。確かに、明治三大事業の推進により、近代都市・京都が生成し、大正初年の〈京都〉像も多く踏まえられていた。

しかし、「城崎行の運行時間」の他にも、「祇園石段下の市電」「電話の値段」「如拙」の記述、「独逸物の映画」「蠣船」の記述等は、「大正末年から昭和二年」のものであり、『改造』に掲載された時期とも重なっている。従って、後篇の〈京都〉像は、「大正初年から昭和二年」あたりのものを反映させたといえる。

〈京都〉は、明治時代から近代政策が行われ、疏水事業が完成し、日本最初の水力発電所が生まれた。それにより、電燈が灯り、道路が拡張され、市電が走った。その後、新京極が生まれ、公園が作られて、近代都市・京都が誕生する。『暗夜行路』後篇も、京都の近代化を辿るかのように、道路拡張や市電の表記だけではなく、西洋の建築物や娯楽、文化施設なども描かれてゆく。

『暗夜行路』後篇は、明治の近代化政策だけではなく、モダニズムの時代の文化現象をを内包したかたちで、近代都市・京都が表象されていると考えるべきである。

注

（1）『暗夜行路』後記（『志賀直哉全集』第十巻、岩波書店、一九七三・一一）

（2）『志賀直哉全集』（第十巻、岩波書店、一九七三・六）
（3）京都府、一九二八・一〇
（4）株式会社同朋舎出版、一九九四・五
（5）勁草書房、一九八七・四
（6）『村嶋歸之著作選集』（第一巻、柏書房、一九三一）
（7）（3）に同じ
（8）同右
（9）駒敏郎『京都西陣織屋町』（駸々堂出版、一九七五・一一）
（10）日本アート・センター編集『京都の大路小路』（小学館、二〇〇三・七）
（11）一九三六・一二、京都帝国大学
（12）立風書房、一九七八・二
（13）沖中忠順・福田清二『京都市電が走った街今昔』（ＪＴＢ、一九九九・一二）
（14）同右
（15）同右
（16）同右
（17）三宅俊彦『復刻版昭和戦前時刻表』（新人物往来社、一九二九・五）
（18）松下隆章『如拙・周文』（集英社、一九七九・一一）
（19）（11）に同じ
（20）高陽社印刷所、一九三五・一二
（21）財団法人京都キリスト教青年会、一九七五・二
（22）歌曲選集［Ｆ・シューベルト作曲］木下保編［楽譜資料］春秋社、一九四九
（23）「値段史年表明治・大正・昭和」（朝日新聞社、一九九八・六）の物価水準によると、大正一五年の「国家公務員初任給」は七五円、平成一六年は二〇一、三七六円で、そこから換算すると六百円の電話は、今の約一六一万円に相当する。
（24）日本電信電話株式会社、一九九〇、七
（25）（京都商工人名録発行、大正一四年一二月）
（26）『ヨーロッパ映画２００』（キネマ旬報社、一九四八・一）
（27）駸々堂出版株式会社、昭和五〇・一一
（28）京を語る会、一九九〇・九
（29）（3）に同じ
（30）「近松浄瑠璃集　上」（『日本古典文学大系』（49　岩波書店、一九五八・一一）
（31）帝国興信所京都支所、一九二八・一〇
（32）佛教大学の金成子氏の卒業論文（二〇〇五・九）には、「「暗夜行路」における〈飛行機〉についての一考察―」中の「「暗夜行路」における〈飛行機〉」には、大丸における荻田氏の飛行機の展覧について、詳細な記述があるので参考にし、再調査をした。

（アオキ　キョウコ　嘱託研究員）